

跡見花蹊の青春をたどる

跡見学園中学校高等学校校長 嶋田英誠



跡見花蹊ゆかりの地・大阪を訪れた折々の写真から、
その中之島塾跡の今日の姿をご紹介します。

花蹊のルーツを めぐる旅へ

安政5年（1858）19歳の跡見花蹊は大阪の中之島に父とともに塾を開き、これより慶

平春嶽 蔵屋敷、堂島川北岸の
〔五〕は肥前佐賀藩（鍋島家）蔵屋敷、その前の河岸は鍋島浜。土佐堀に架る淀屋橋から南下する淀屋橋筋〔図2〕は、今日の御堂筋。

応元年（1865）まで足掛け8年間この地で教育と勉学にいそしみました。これが、跡見学園のそもそのルーツです。

花蹊の塾は、そのころ福井藩蔵屋敷に接して堂島川を眼下に収める位置、今日の大阪府立中之島図書館や大阪市中央公会堂の北側近辺〔図3・4〕（北区中之島1丁目）にありました。

中之島は今は大阪市の中央官庁街ですが、当時も大坂三郷の真中でした。まず、1843年当時の上中之島町周辺の地図〔図1〕を示します。土佐堀川と堂島川に挟まれた中洲が中之島、その東端を上中之島町といえます。図1中の〔漢数字〕は全国の各藩大名の蔵屋敷ですが、中之島の〔五四〕は越前福井藩（松

花蹊の家からは堂島川を行く天満の船渡御〔図5〕や、対岸の鍋島浜〔図6〕に発着する船、乗降する客、左手に架かる大江橋〔図7〕を渡る人の姿などがよく見えました。この辺りは明

図1. 上中之島町近辺の地図（1843年当時）。『大阪市史』附図より。
図2. かつて淀屋橋の上から見た淀屋橋筋。『ふるさとの想い出写真集 大阪』より。
図3. 跡見花蹊塾跡（附近）。
図4. 堂島川北岸より中央公会堂（向って左）・府立図書館（右）を望む。
図5. かつて勢揃いした天満の船渡御。『ふるさとの想い出写真集 大阪』より。

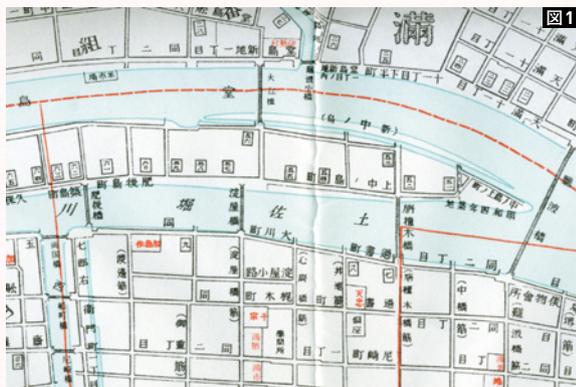




図7. 大江橋。



図6. 鍋島浜。



図10. 淀屋小路。高橋正純はこの一角で時計修理屋を営んでいました。



図9. 後藤松陰の広業館塾跡。



図8. 緒方洪庵が営んだ適塾跡。



図11. 御霊神社。



図12. 御霊筋。御霊神社より北を見る。

治以降全面的に都市改造されたので、今や花咲時代の街の姿をしのぶことはできなくなっています。ここでは、船場の過書町に残る適塾の跡【図8】（東区北浜3丁目）に、かつての大阪の町屋の姿をしのんでおきましょう。

塾で生徒を教える一方、花咲は自らもなお勉学に励みました。もっともよく通ったのは後藤松陰の漢学塾「広業館」、梶木町（土佐堀川の南を東西に走る二筋目の道で、心齋橋筋から西横堀まで）と御霊筋（淀屋橋筋の一本西を南北に走る道）の角【図9】にありました。和歌の師高橋正純は淀屋小路【図10】に住

んで時計修理屋を営んでおり、茶の湯の宗匠木津宗詮（二代）は梶木町に道場を構えていました。いずれも今日の東区北浜3〜4丁目にあたり、中之島の花咲塾から徒歩数分の距離に位置しています。

御霊筋をさらに十分ほど南に下ると、御霊神社【図11】があります。当時ここには人形浄瑠璃の小屋がかかり、にぎわっていましたが【図12】。花咲はしばしば息抜に出かけ、朝から夕方まで芝居見物に興じました。

以上のように、中之島から北浜は花咲先生の青春の地です。大阪に行く機会があったら、散歩してみませんか。